

遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

⑬

顧客第一 —— 客はボタンで確認せよ

石垣青年と2代目音吉とのやりとりはまだある。

ある日、音吉は家の子郎党を連れて明石海峡でヨット遊びを楽しんだ。ヨットはフランス領事の持っていたものをゆずり受けたもので、当時神戸ヨット・クラブの会員は日本人ではただ2人、あとは外国人ばかりだった。

外国人を交えたガーデンパーティーなど万事賑やかなことの好きな音吉は、当時としては先端をゆくヨット旅行をししばし楽しんだ。

明石海峡の真中まで来たとき、音吉は石垣青年をおおった。「海岸まではとても泳げないだろう」。泳げる泳げないの応答のあげく石垣青年は怒り心頭、ヤッとばかりに海へ。抜手を切って泳ぎかけた。驚いたのは音吉で、「石垣が死ぬう、フカに食われてしまう」と大さわぎ。とうとう「オレが悪かったア」の大声が波間に届き、石垣青年は息たえだえにUターン……。

こんな話はまだ山ほどある。大声でどなりつけるかわり、大声であやまる。そこに何のちゅうちょもてらいもない。



飯訪山の柴田家の庭で、家族、従業員一同（昭和初年）

よその番頭でも、態度が悪かったりすると怒った。

稚気さえ感じられる喜び方怒り方の反面、ひどく繊細で気のつくところもあった。

地方への旅行には、その地に通じた社員をともなった。その旅先で得意先に逢い、顔を知らないでは失礼だという配慮からだった。そんなとき音吉はさっと駅弁を買い、同行の社員に渡すというような気さくなこだわらない性格も見せた。

汽車の旅もあったが、別府航路での船旅もある。船上で行き交う人のなかには柴田のお客がいるかもしれない。

「よく気をつけて失礼のないようにせい」というのが音吉の命令である。確認の方法は

ひとつ。洋服のボタンである。

柴田の店では全部英国製特注のボタンを使っている。

ズボンのボタンは O.SIBA TA の名が入っているが、まさかのにぞきかねる。上衣は見まぢがいやすいから、同行の社員は気の休まらないことおびたらしい。それほど音吉は顧客を大事にした。

客の忘れ物であるカメラがたまたま机の端に寄り、今にも落ちそうなを見たときも烈火のごとく怒った。怒るのは道理である。で、社員は神妙にする。するともうその社員に「何かうまいもの」を食べさせずにはいられない音吉であった。(つづく)

岡和子記者